

陸側遮水壁の状況

2019年4月25日

TEPCO

東京電力ホールディングス株式会社

目 次

TEPCO

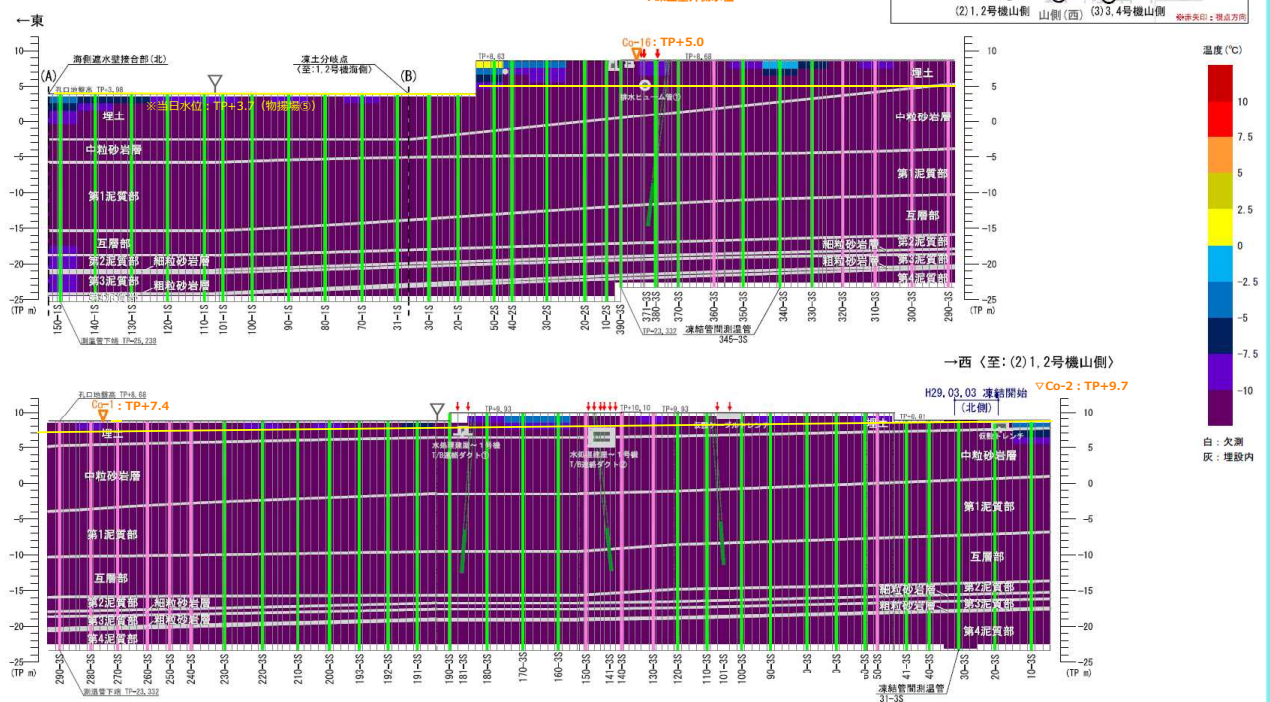
1. 地中温度の状況について	P2～7
2. 地下水位・水頭の状況について	P8～11
3. 維持管理運転の状況について	P12
参考資料	P13～25

1-1 地中温度分布図（1号機北側）

■ 地中温度分布図

(1)1号機北側（北側から望む）

（温度は4/23 7:00時点のデータ）



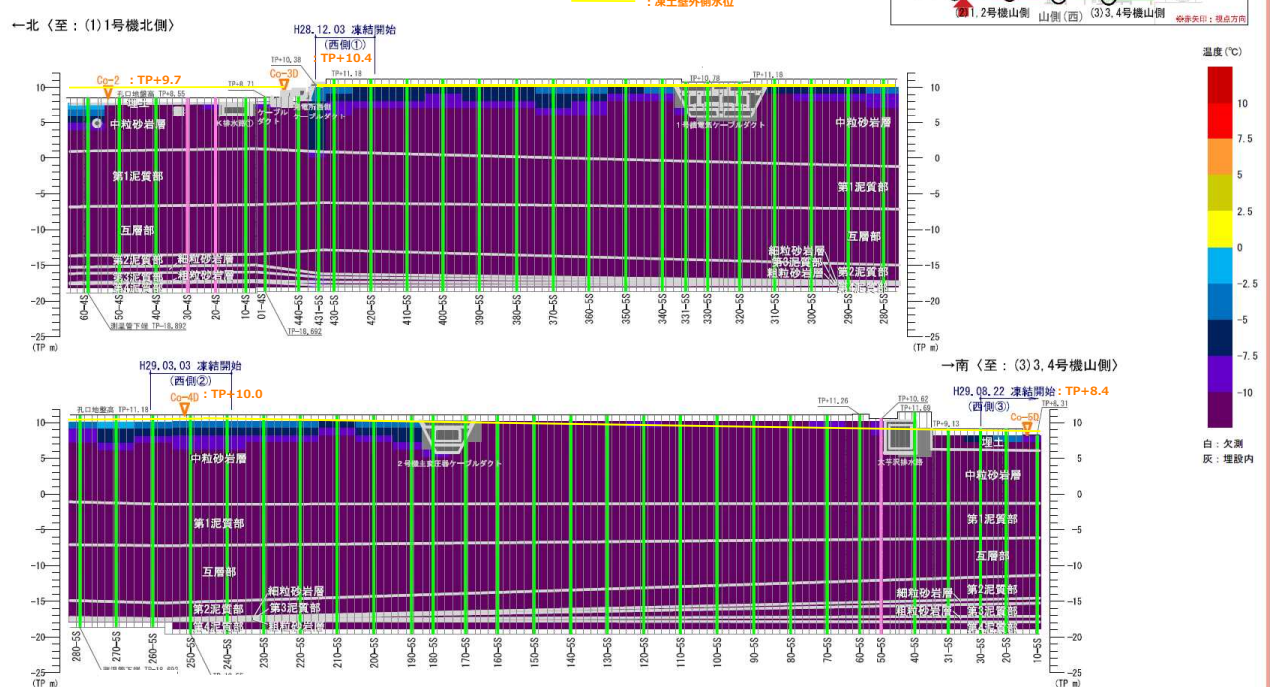
2

1-2 地中温度分布図（1・2号機西側）

■ 地中温度分布図

(2)1,2号機山側（西側から望む）

（温度は4/23 7:00時点のデータ）



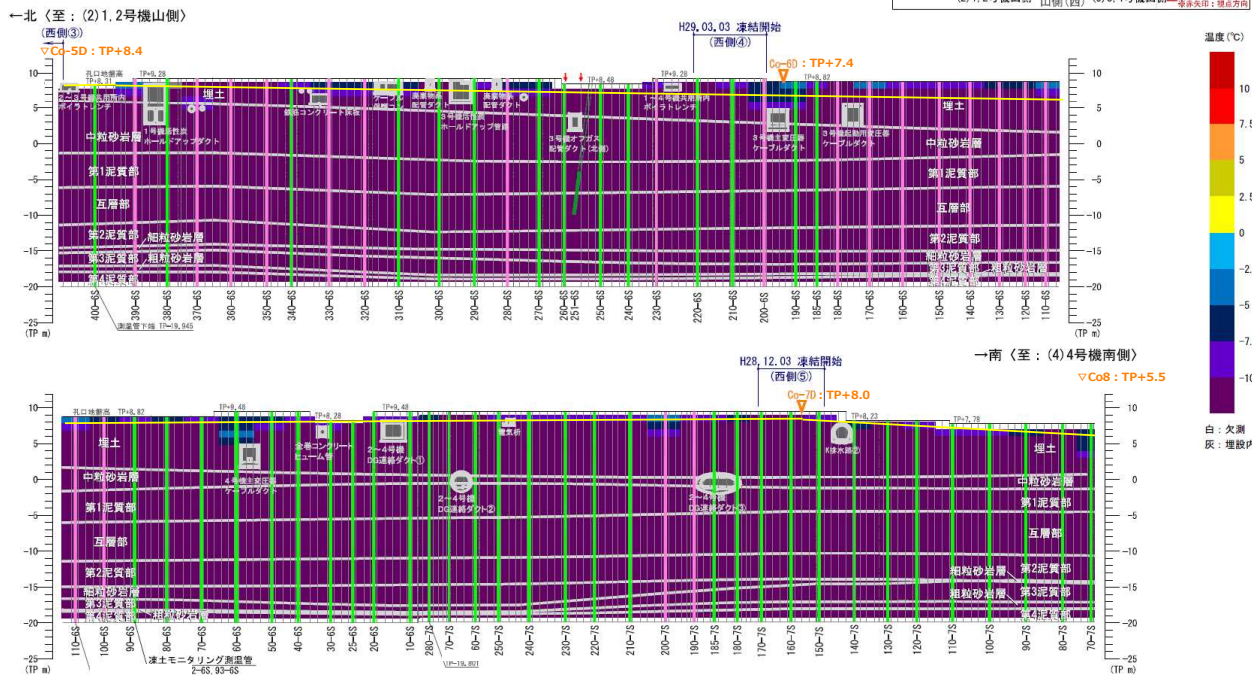
3

1-3 地中温度分布図 (3・4号機西側)

■ 地中温度分布図

(3)3,4号機山側 (西側から望む)

(温度は4/23 7:00時点のデータ)



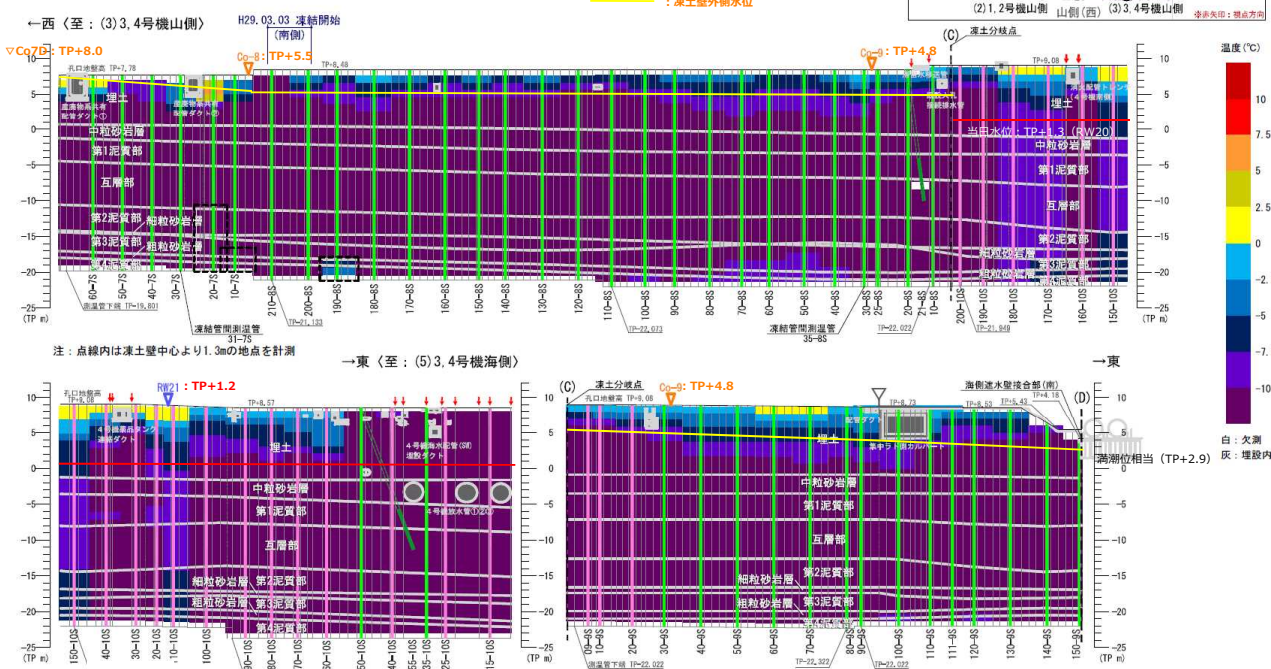
4

1-4 地中温度分布図 (4号機南側)

■ 地中温度分布図

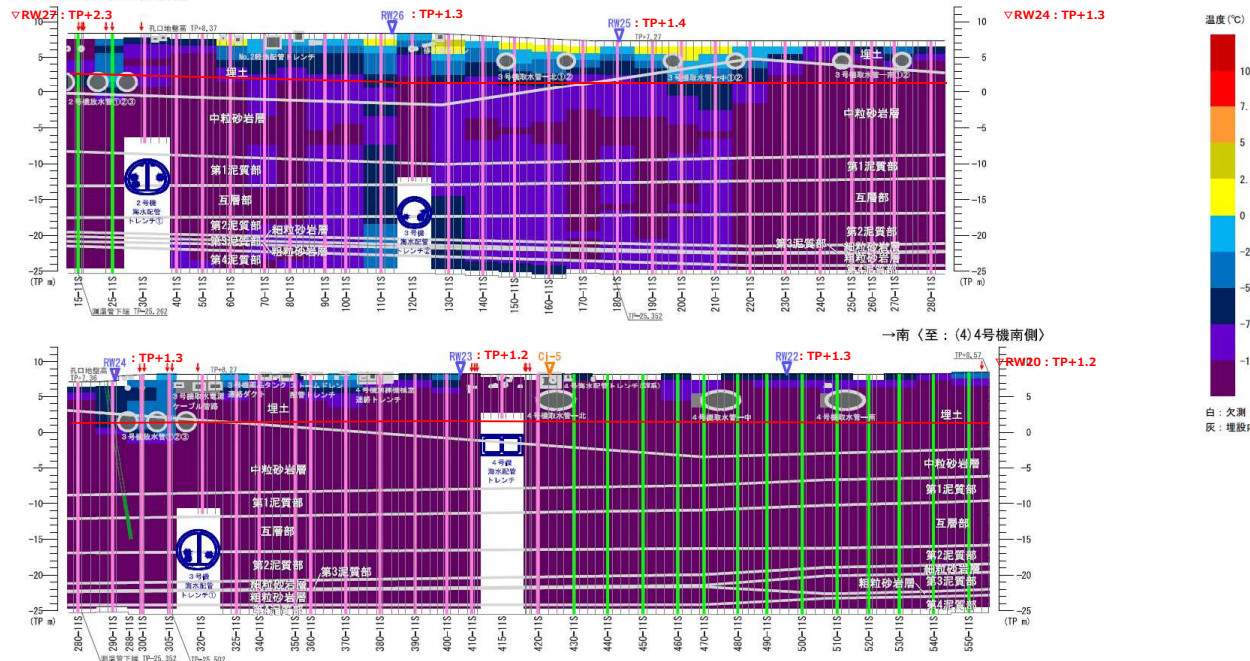
(4)4号機南側 (南側から望む)

(温度は4/23 7:00時点のデータ)



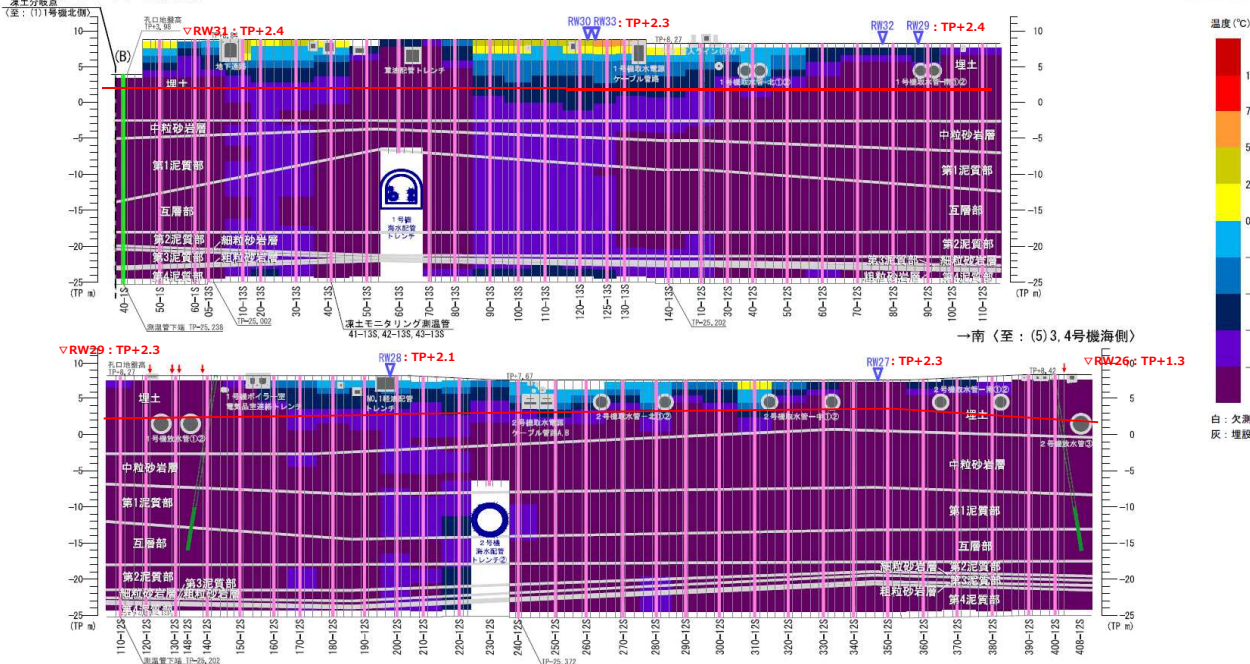
5

TEPCO



6

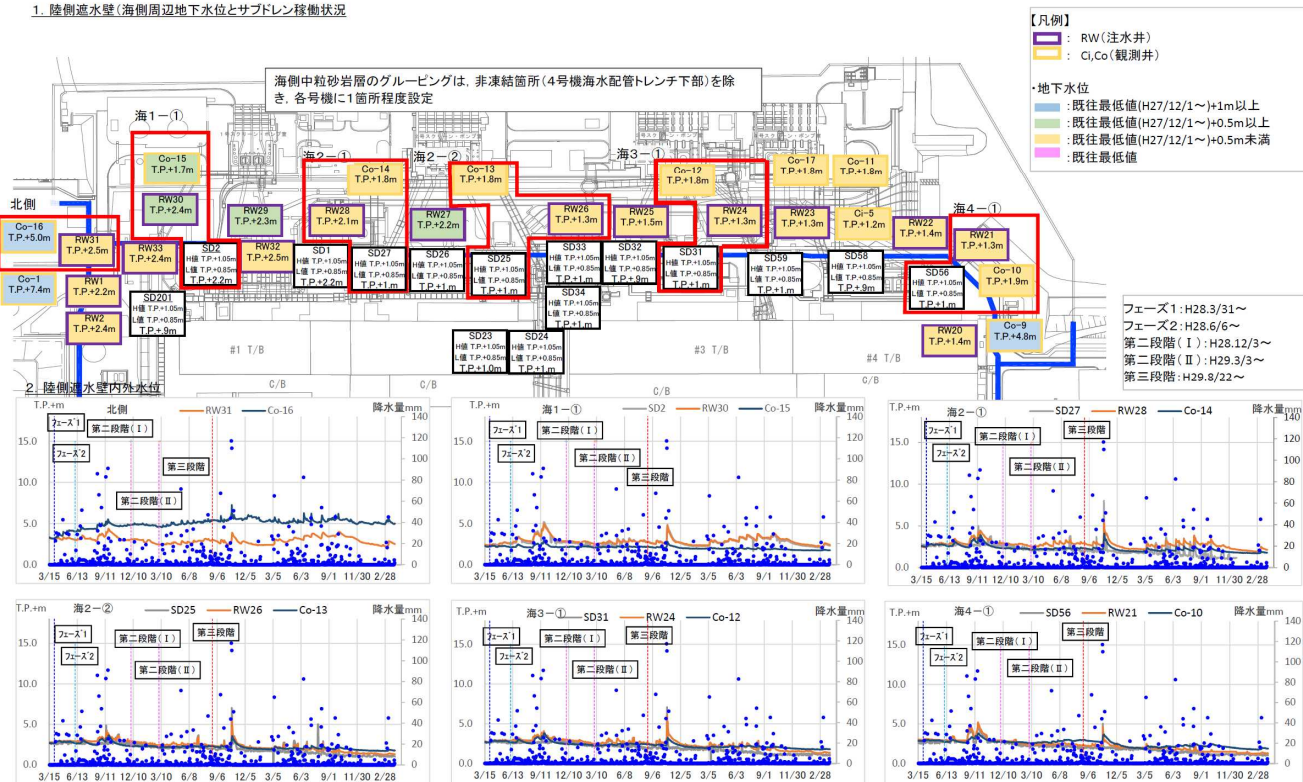
TEPCO



7

2-1 地下水位・水頭状況（中粒砂岩層① 海側）

1. 陸側遮水壁（海側周辺地下水位とサブドレン稼働状況）

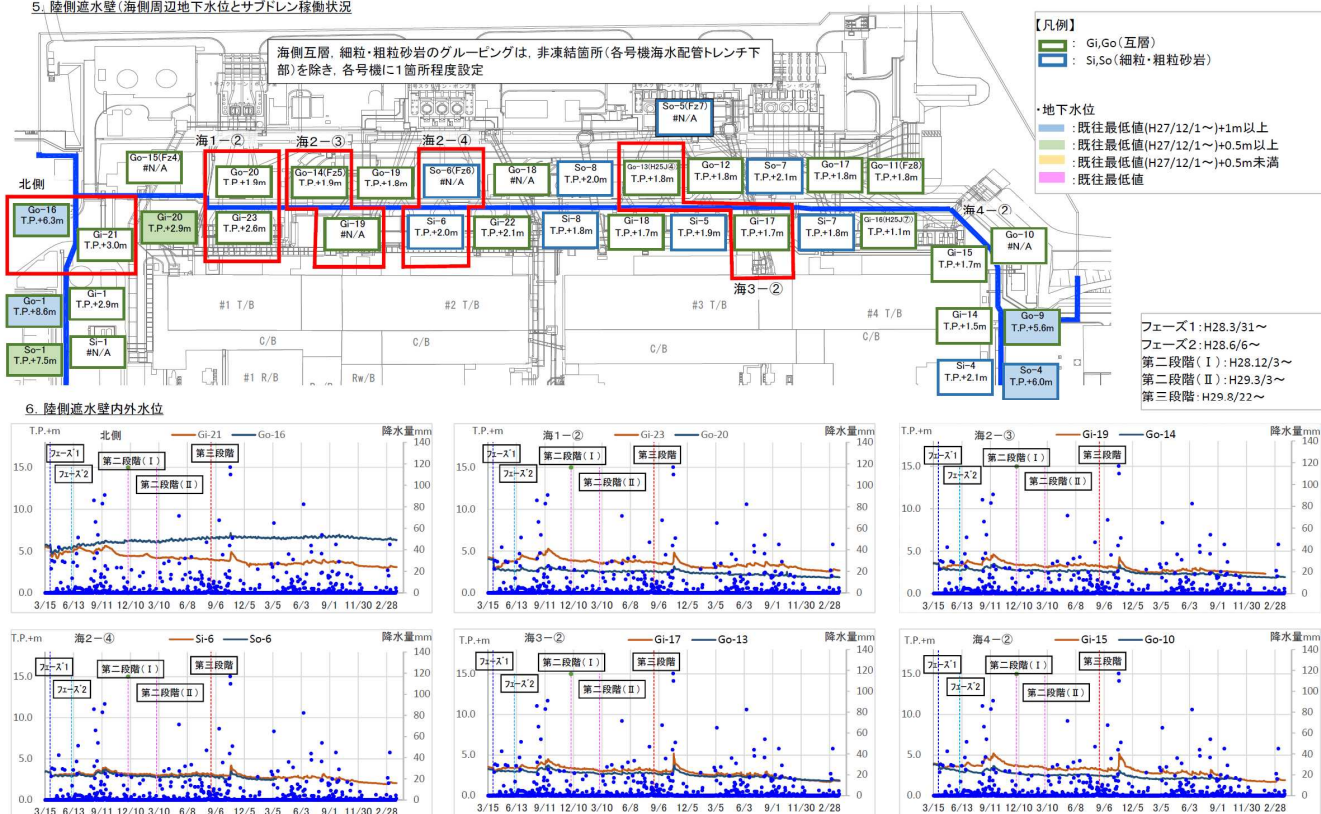


・地下水位は4/22 7:00時点のデータ

2-2 地下水位・水頭状況（互層、細粒・粗粒砂岩層水頭① 海側）

陸側遮水壁運用における監視項目（海側 互層、細粒・粗粒砂岩水位）

5. 陸側遮水壁（海側周辺地下水位とサブドレン稼働状況）

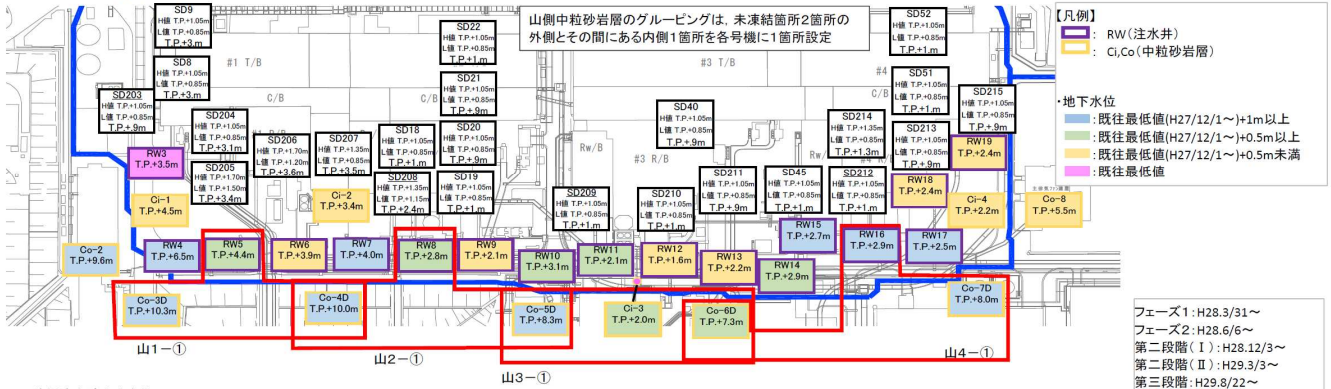


・地下水位は4/22 7:00時点のデータ

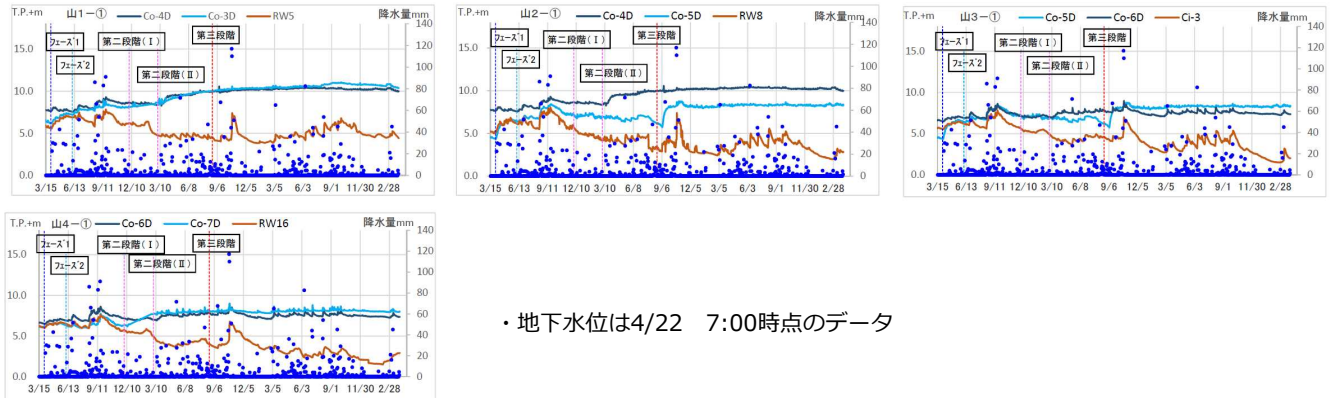
2-3 地下水位・水頭状況（中粒砂岩層② 山側）

陸側遮水壁運用における監視項目（山側 中粒砂岩層水位）

3. 陸側遮水壁（海側周辺）地下水位とサブドレン稼働状況



4. 陸側遮水壁内外水位

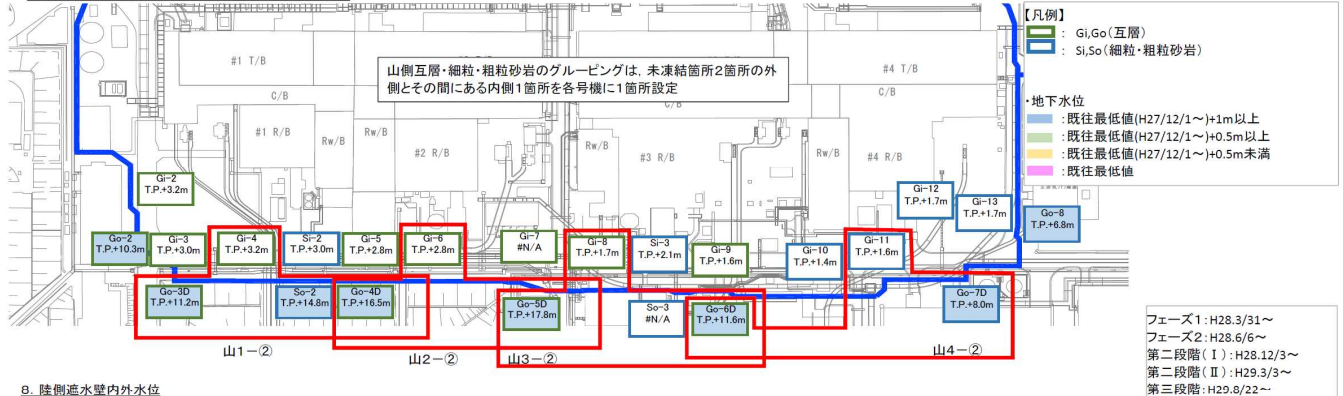


10

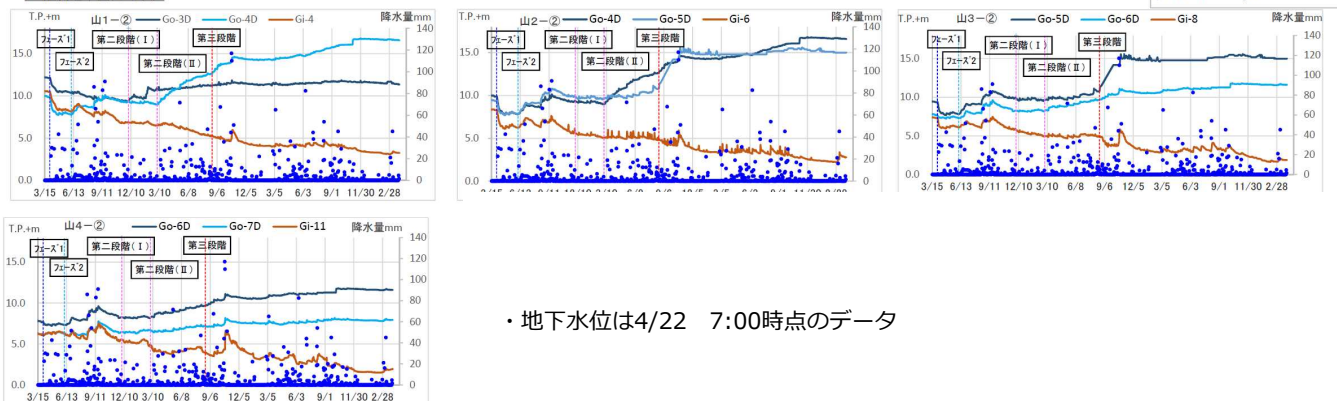
2-4 地下水位・水頭状況（互層、細粒・粗粒砂岩層水頭② 山側）

陸側遮水壁運用における監視項目（山側 互層、細粒・粗粒砂岩層水位）

7. 陸側遮水壁（海側周辺）地下水位とサブドレン稼働状況

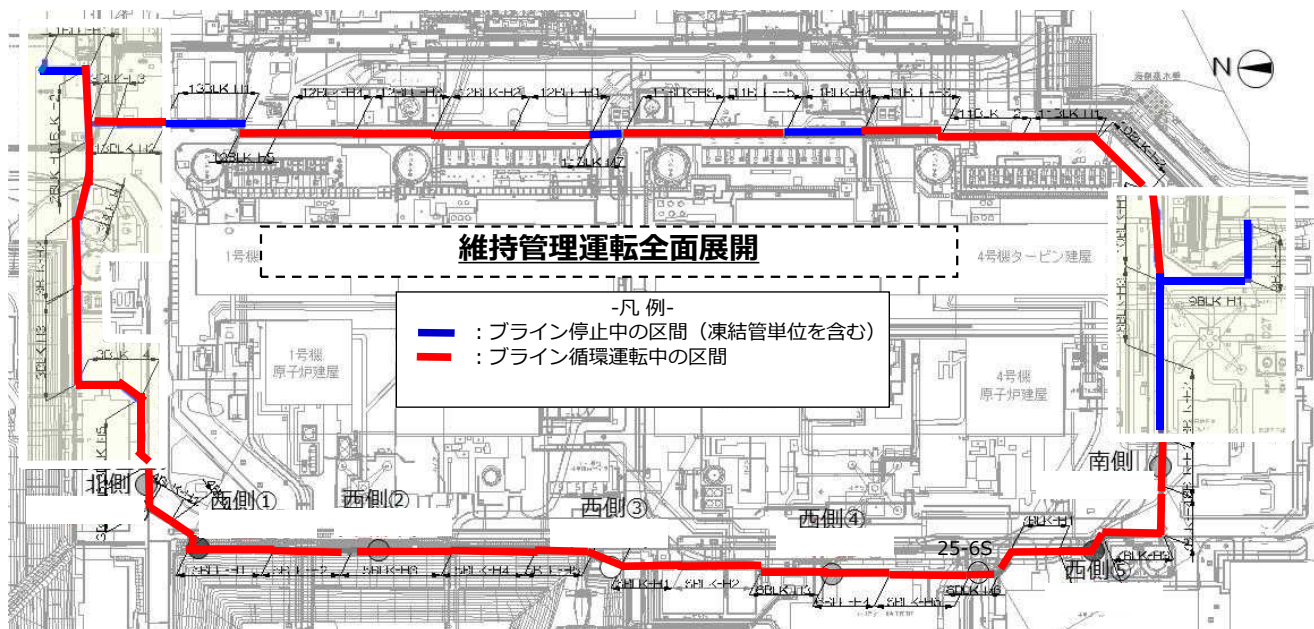


8. 陸側遮水壁内外水位



11

- 維持管理運転対象全49ヘッダー管（北側11，南側8，東側15，西側15）のうち、8ヘッダー管（北側1，南側4，東側3，西側0）にてブライン停止中。
【全体 8/49ヘッダー ブライン停止中】

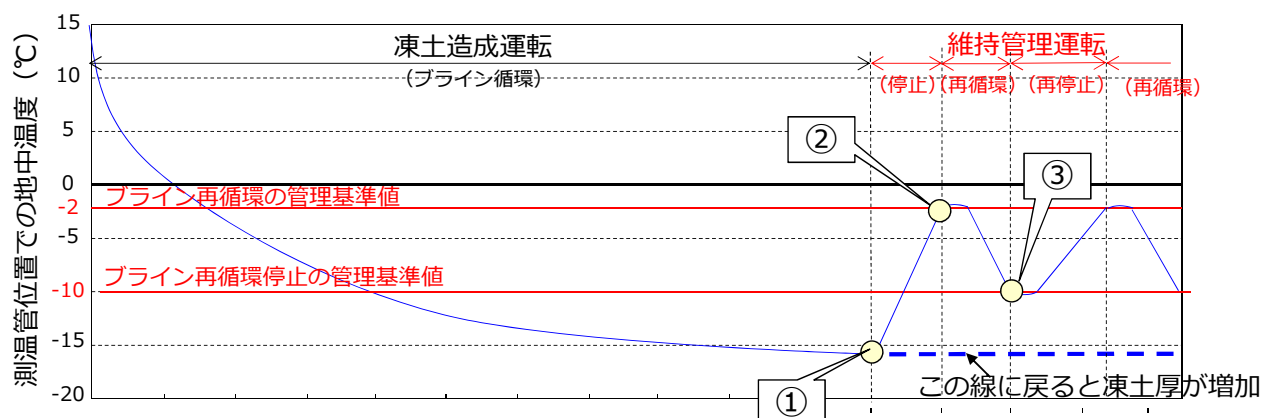


12

【参考】 維持管理運転の方法について

■ 維持管理運転時の地中温度イメージ

- ・ 維持管理運転に移行後（①），ブライン再循環の管理基準値（②）とブライン再循環停止の管理基準値（③）を設定し，地中温度をこの範囲で管理する。



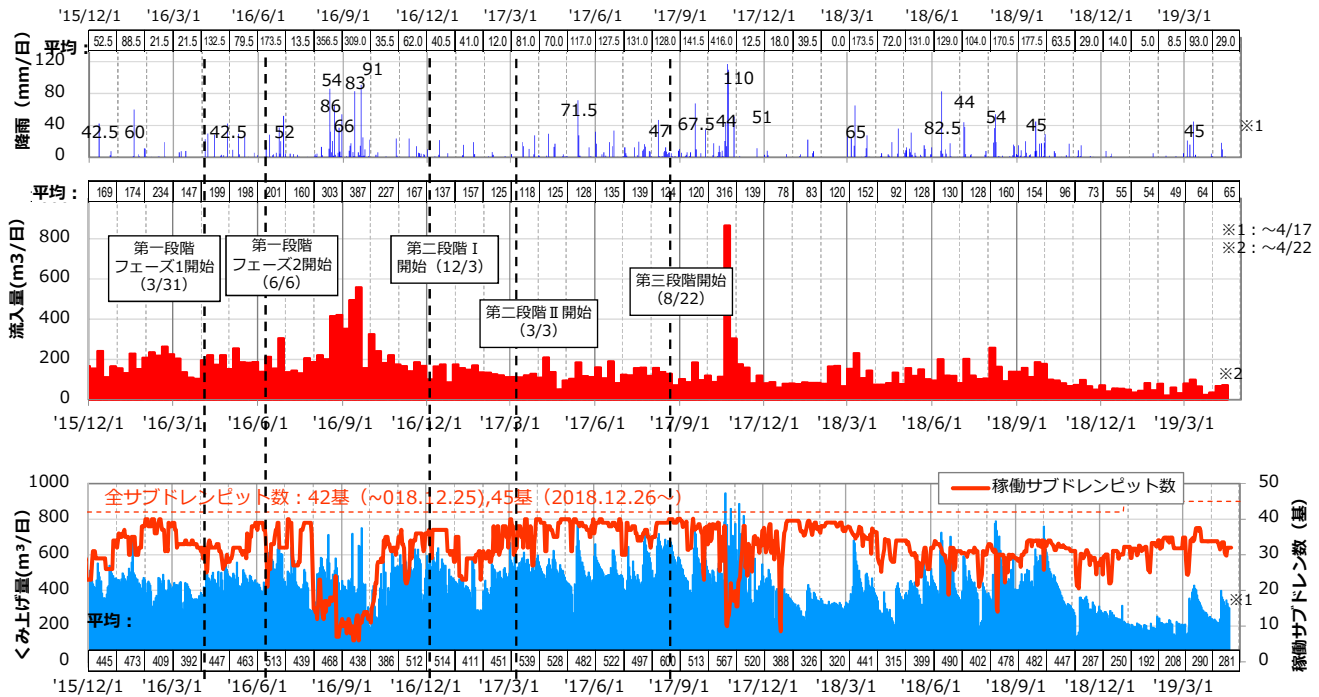
<維持管理運転の制御ポイント>

- ① : 維持管理運転へ移行
- ② : ブライン再循環 ……測温点のうちいずれか1点で地中温度-2℃以上※
- ③ : ブライン循環再停止…全測温点-5℃以下※，かつ全測温点平均で地中温度-10℃※以下

* ブライン停止および再循環の管理基準値は，データを蓄積して見直しを行っていく。
* 急激な温度上昇や局所的な温度上昇が確認された場合には，個別に評価を行い維持管理運転の運用方法を再検討する。

13

- 建屋流入量（建屋への地下水・雨水流入量）およびサブドレンくみ上げ量は、陸側遮水壁（山側）の閉合進展に伴い減少し、建屋流入量は2017年12月に約71m³/日、サブドレンくみ上げ量は2018年2月25日にサブドレン全基稼働状態で約300m³/日となった。現状では降雨量が少ないこともあり減少傾向ではあり、建屋への流入量は約70m³/日、サブドレンくみ上げ量は約280m³/日となっている。

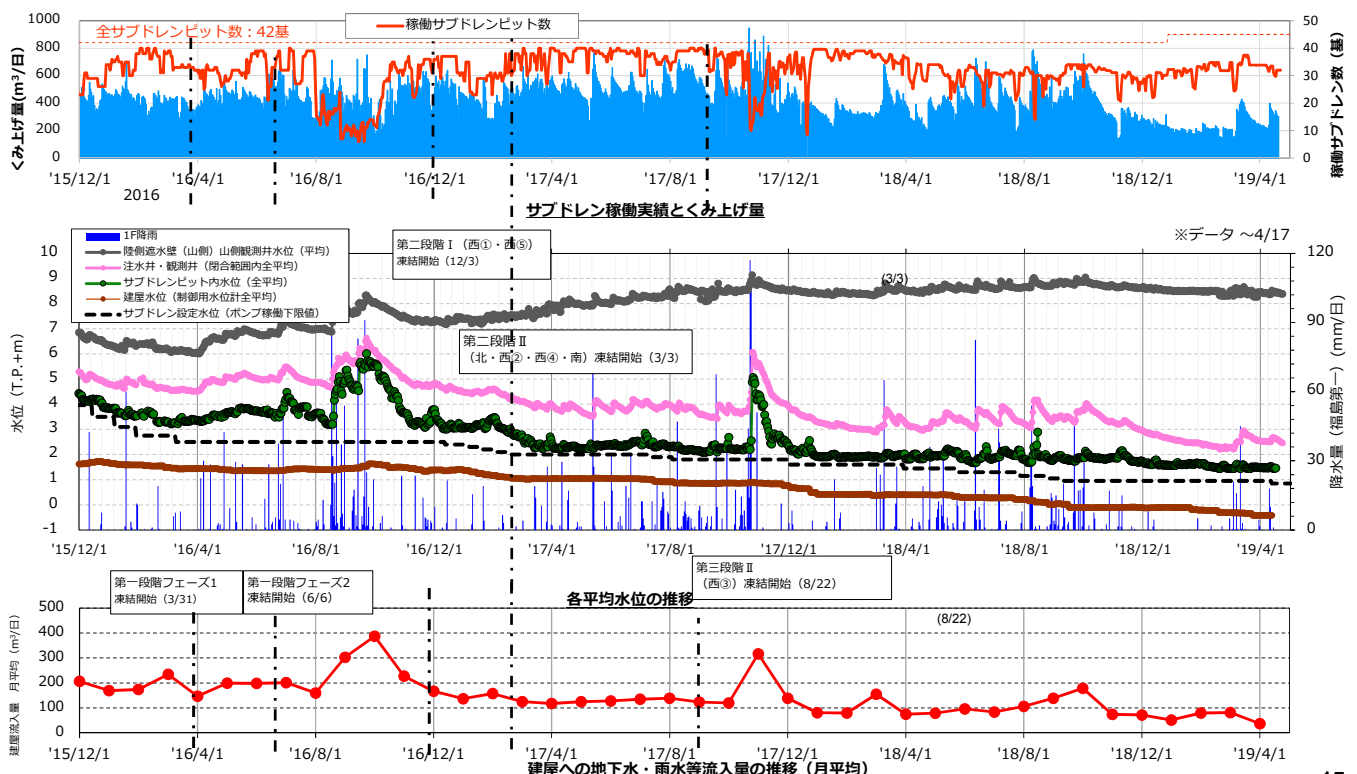


14

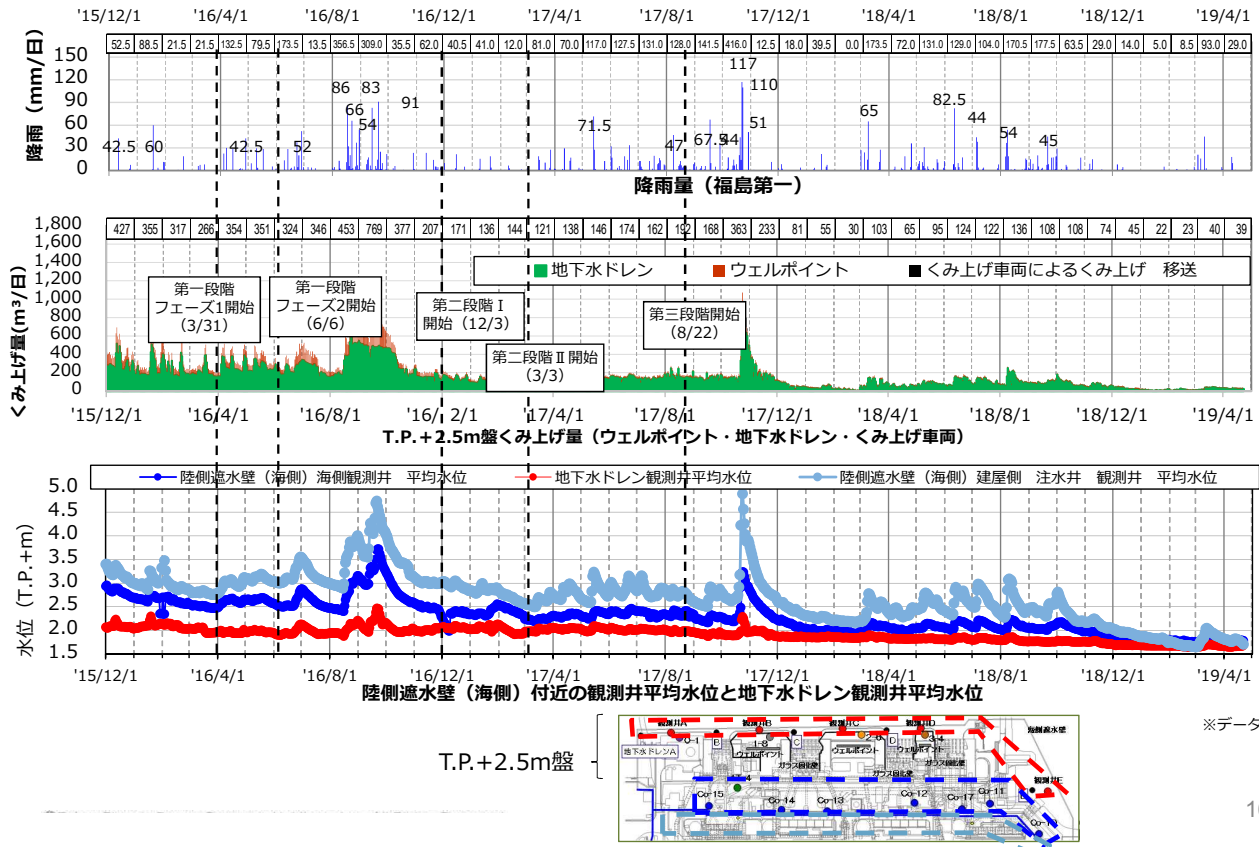
【参考】サブドレンによる地下水位制御性の向上

- サブドレン信頼性向上対策の一部実施完了（配管単独化 等）により、サブドレンによる建屋周辺地下水位の制御性が向上し、ピット内水位をポンプ稼働設定水位の範囲内にほぼ制御出来ている。
- 1 / 2号機排気筒周辺のH-3濃度が上昇しており、サブドレンの稼働を抑制している。
- 2017年10月の台風21号の際には、短期的大雨により建屋周辺地下水位の上昇および建屋流入量の想定以上の増加が確認されたが2018年の台風では、降雨量が少ないこともあり、2017年のような現象は確認されていない。

※データ ～4/17



15

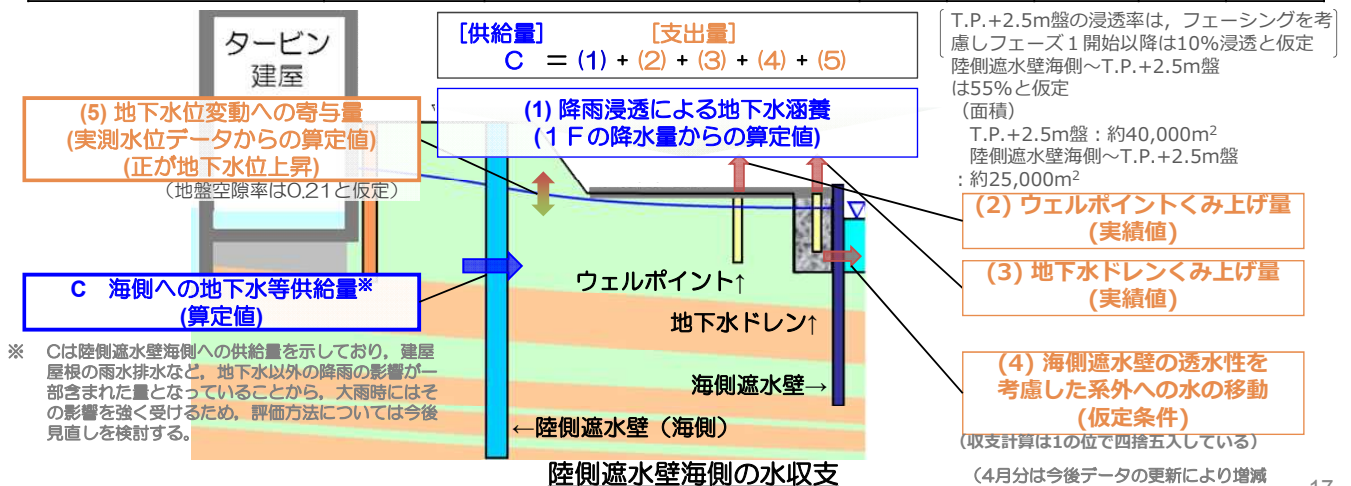


16

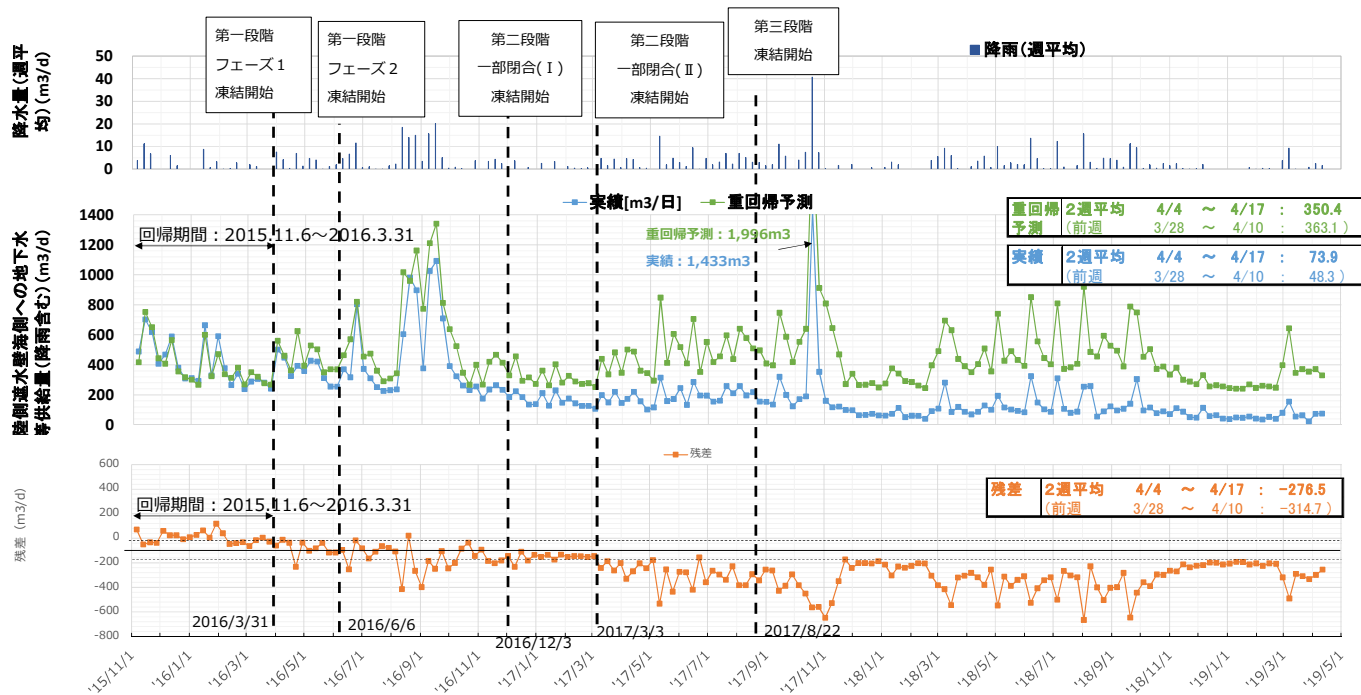
【参考】 凍結開始前と現状の陸側遮水壁海側(T.P.+2.5m盤)の水収支の評価 **TEPCO**

- 凍結開始前と現状の陸側遮水壁海側(T.P.+2.5m盤)の水収支を比較すると、陸側遮水壁海側への地下水等供給量は大雨による一時的な増加はあるものの、全体としては陸側遮水壁閉合前と比較して大幅に減少している。
- 減少している要因は、雨水浸透防止策（フェーシング等）、サブドレン稼働、陸側遮水壁（海側）の閉合などの複合効果によるものと考えられる。

実績値(m³/日)	(参考)降水量	陸側遮水壁海側への地下水等供給量C*	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
2016.1.1~3.31	1.4 mm/d	310	-40	80	240	50	-20
2018.1.1~3.31	2.4 mm/d	50	-40	10	50	30	0
2018.12.1~12.31	0.5mm/d	50	-10	10	30	30	-10
2019. 1.1~ 1.31	0.2mm/d	50	0	10	10	30	0
2019. 2.1 ~ 2.28	0.3mm/d	40	0	10	10	30	-10
2019.3.1~3.31	3.0mm/d	20	-50	10	30	30	0
(参考)2019.4.1~4.17	1.7mm/d	40	-30	10	30	30	0



- 陸側遮水壁海側エリアへの水供給量※を目的変数、降雨の影響が大きいと思われる35日前までの週間平均降雨量を説明変数として、陸側遮水壁（海側）の凍結開始以前のデータに基づく重回帰分析を行い、実績値と予測値の比較を行った。（※：地下水等移動量C+降雨涵養量(1)（水収支計算上の支出量である(2),(3),(4),(5)の合算により算定））
- 「陸側遮水壁海側エリアへの水供給量（C+(1)）」について、陸側遮水壁（海側）の凍結開始前の水供給量をもとに重回帰分析による予測値と実績値を比較すると、陸側遮水壁海側エリアへの水供給量が280m³/日程度減少している。



18

【参考】凍結開始前と現状の陸側遮水壁内側(T.P.+8.5m盤)の水収支の評価

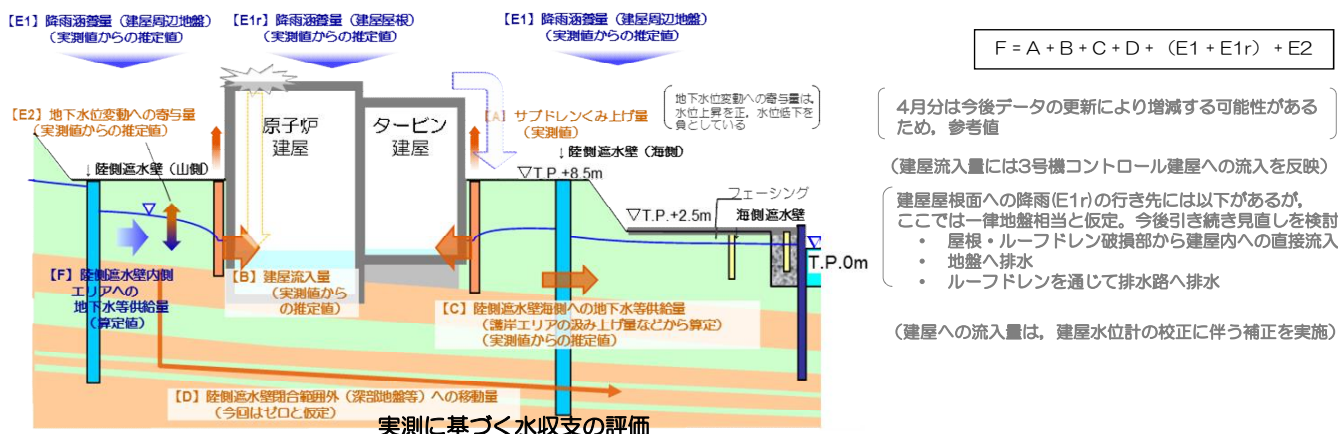
- ・ 凍結開始前と現状で陸側遮水壁内側の水収支を比較すると、陸側遮水壁内への地下水等供給量は減少している。

実績値(m³/d)	陸側遮水壁内側エリアへの地下水等供給量(実測からの推定値) F※1	<参考> サブドレン 平均水位	<参考> 日平均降雨量	サブドレンくみ上げ量(実測値) A	建屋流入量(実測からの推定値) B	陸側遮水壁海側への地下水等移動量 C※1,2 (実測からの推定値)	閉鎖範囲外への移動量 D※3	降雨涵養量(実測からの推定値) (E1+E1r)※1,2	地下水位変動への寄与量(実測からの推定値) E2※1,2
2016.1.1~3.31	810	T.P.+3.5m	1.4mm/d	420	180	310	0	-(50+30)	-20
2018.1.1~3.31	390	T.P.+1.9m	2.4mm/d	360	120	50	0	-(80+50)	0
2018.12.1~12.31	240	T.P.+1.6m	0.5mm/d	250	50	50	0	-(20+10)	-80
2019.1.1~1.31	250	T.P.+1.6m	0.2mm/d	190	50	50	0	-(10+0)	-30
2019.2.1~2.28	230	T.P.+1.5m	0.3mm/d	210	50	40	0	-(10+10)	-50
2019.3.1~3.31	280	T.P.+1.5m	3.0mm/d	290	60	20	0	-(110+60)	80
(参考)2019.4.1~4.17	310	T.P.+1.4m	1.7mm/d	280	70	40	0	-(60+40)	40

※1 FおよびCは陸側遮水壁内側および海側への地下水等の供給量を評価したものであるが、現状の評価方法では建屋への屋根破損部からの直接流入など、地下水以外の影響が一部含まれた量となっている。

※2 上表は、降雨浸透率や有効空隙率を仮定して算出しているが、その仮定条件には不確実性が含まれている。

※3 現時点まで、深部透水層（粗粒、細粒砂岩）の水頭が互層部と同程度で、上部の中粒砂岩層よりも高いことから、深部地盤等への移動量Dをゼロとする。



19

【実現象】

建屋屋根面への降雨の一部は建屋周辺の地盤に浸透している。また、屋根破損部から建屋内に直接流入している。



【収支計算】

建屋屋根面への降雨は陸側遮水壁内側エリアへの供給量として計上していない。

精度向上のため、水収支計算を実態に合わせて下記の通り見直し

＜従来＞

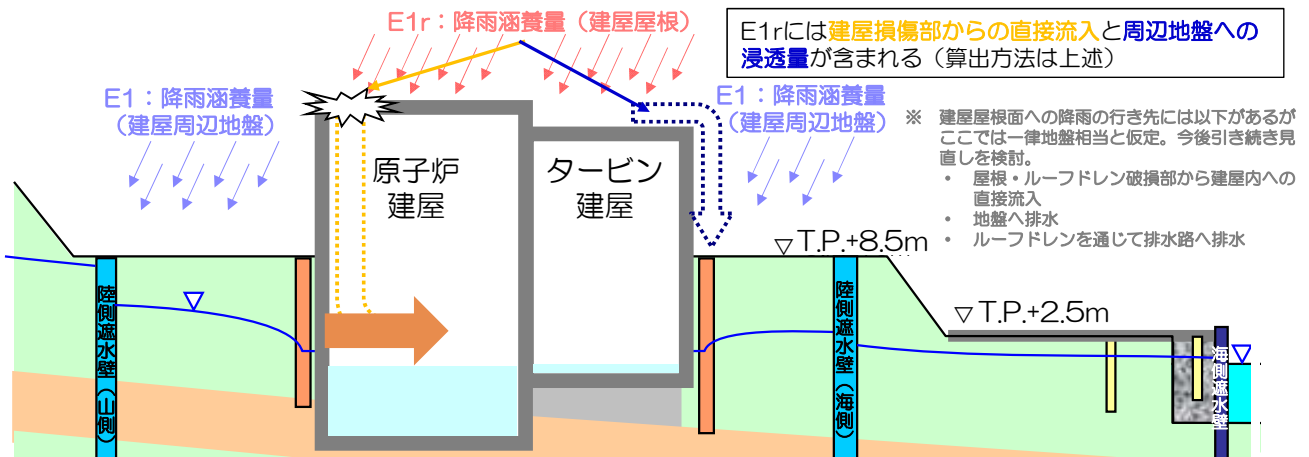
建屋屋根面(約40,000m²)※への降雨は陸側遮水壁外へ排水されると仮定し、対象外としていた。

$$F = A + B + C + D + E1 + E2$$

＜修正後＞

建屋屋根面(約40,000m²)※への降雨の影響について、地盤浸透相当(浸透率55%)と仮定した供給量をE1rとして評価し、建屋周辺の地盤への降雨涵養量(式中におけるE1)へ加算することで、陸側遮水壁内側エリアへの地下水等供給量から控除。ただし、評価方法および適用期間については引き続きデータを分析し、その結果を踏まえて見直しを検討。

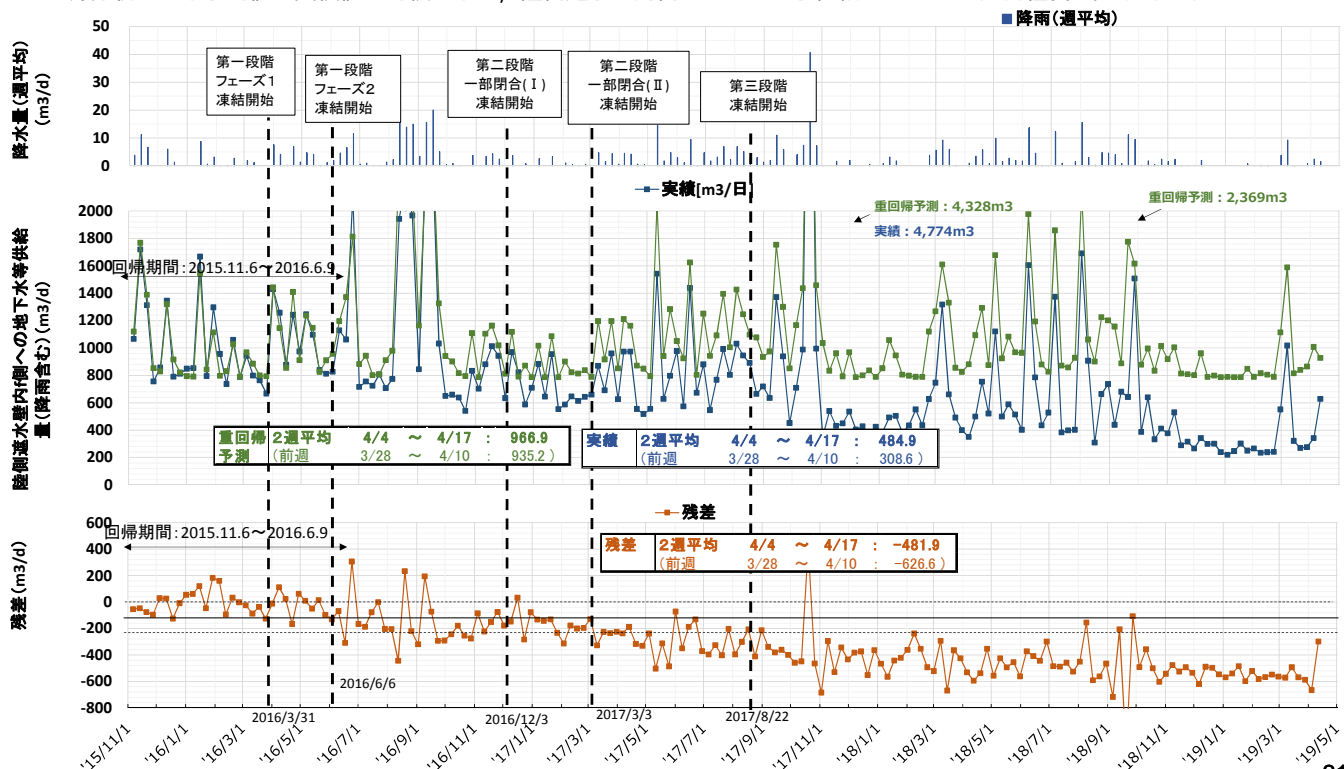
$$F = A + B + C + D + (E1 + E1r) + E2$$



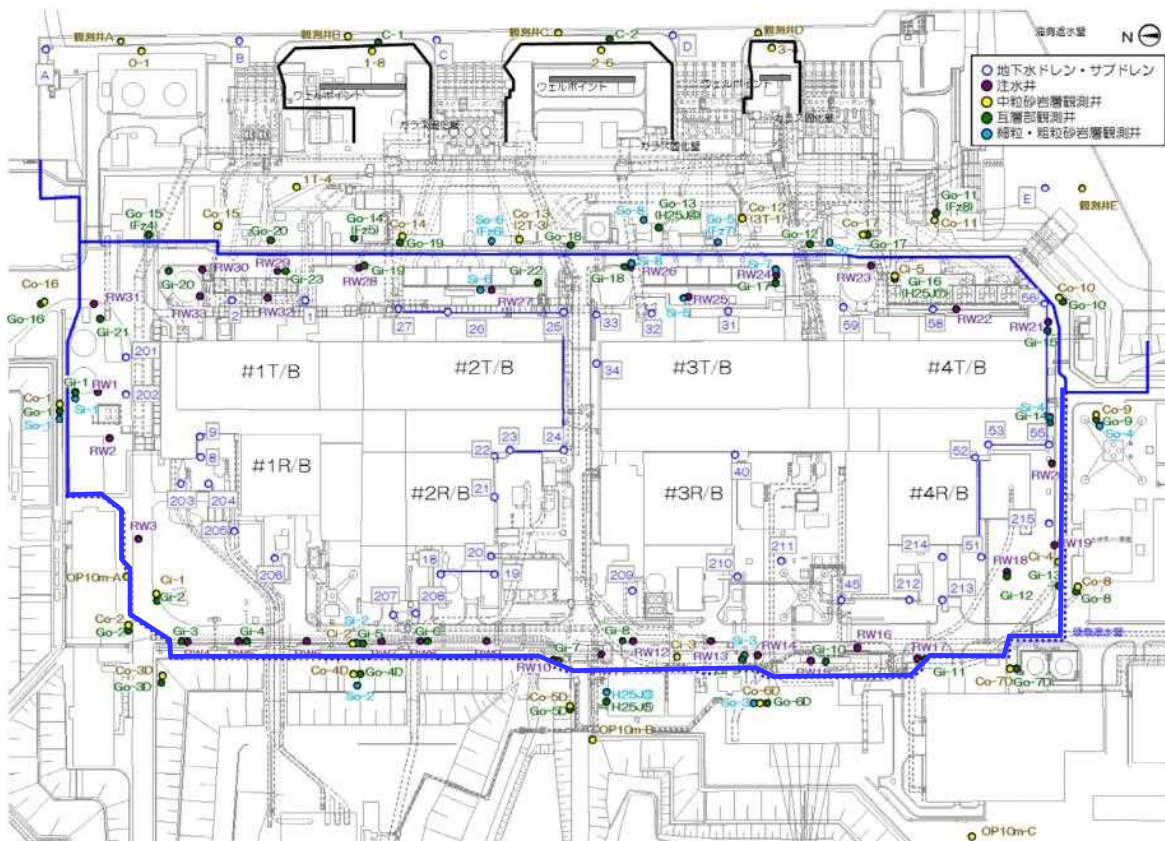
20

【参考】陸側遮水壁内側 重回帰予測と実績値との比較

- 陸側遮水壁内側エリアへの水供給量※を目的変数、降雨の影響が大きいと思われる35日前までの週間平均降雨量を説明変数として、陸側遮水壁(山側)の凍結開始以前のデータに基づく重回帰分析を行い、実績値と予測値の比較を行った。(※: 地下水等供給量F+降雨涵養量(E1+E1r) (水収支計算上の支出量であるA,B,C,D,E2の合算により算定))
- 「陸側遮水壁内側エリアへの水供給量(F+E1+E1r)」について、陸側遮水壁(山側)の凍結開始前の水供給量をもとに重回帰分析による予測値と実績値を比較すると、陸側遮水壁内側エリアへの水供給量が480m³/日程度減少している。



21



22

【参考】TP2.5m盤への水の供給量(地下水流入+降雨浸透)の重回帰分析による評価① **TEPCO**

- 陸側遮水壁閉合後における2.5m盤への水の供給量の低減状況の評価として、陸側遮水壁が閉合していなかった場合の**推定供給量(Q)**を重回帰分析により推定し、18頁の(C+1))と比較した。
- 重回帰分析に当たっては、目的変数を実績供給量、説明変数を影響が大きいと考えられる当日から35日前までの降水量(x_n)とし、導出される**基底量(A)**および**偏回帰係数(B_n)**から、重回帰予測式を下式のように設定した。

推定供給量(Q)の算出(重回帰予測式:2.5m盤)

2.5m盤への水の推定供給量

$$Q = A + (B_1 \times x_1) + (B_2 \times x_2) + (B_3 \times x_3) \dots + (B_5 \times x_5)$$

重回帰分析で求める偏回帰係数

当該週の降雨量 1週前の降雨量 2週前の降雨量 4週前の降雨量

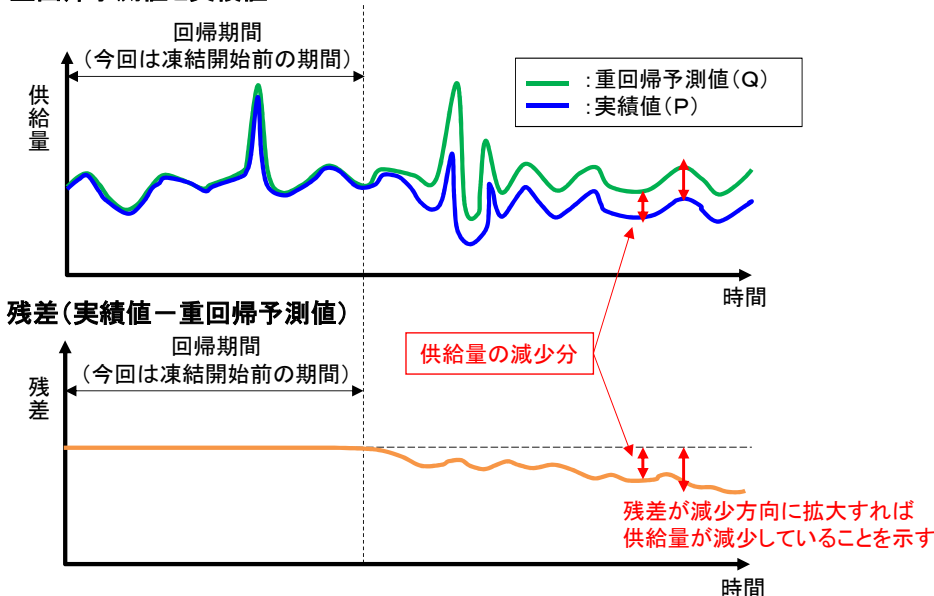
A:基底の地下水流入量(重回帰分析により推定) ΣBx :降水量(福島第一原子力発電所内にて観測された実績値)

23

TP2.5m盤への水の供給量の低減状況の評価の手順は以下のとおり。

- ① 凍結運転開始前の期間を回帰期間として前頁における式を設定し、陸側遮水壁がない状態における2.5m盤への水の供給量の予測値（重回帰予測）を算出する。
- ② 2.5m盤への水の供給量の実績値を算出する（17頁参照）。
- ③ 残差（実績値－重回帰予測値）の推移から供給量の減少傾向を確認する。
⇒ ③において、残差がマイナス方向に拡大すれば供給量が減少していることを示す。

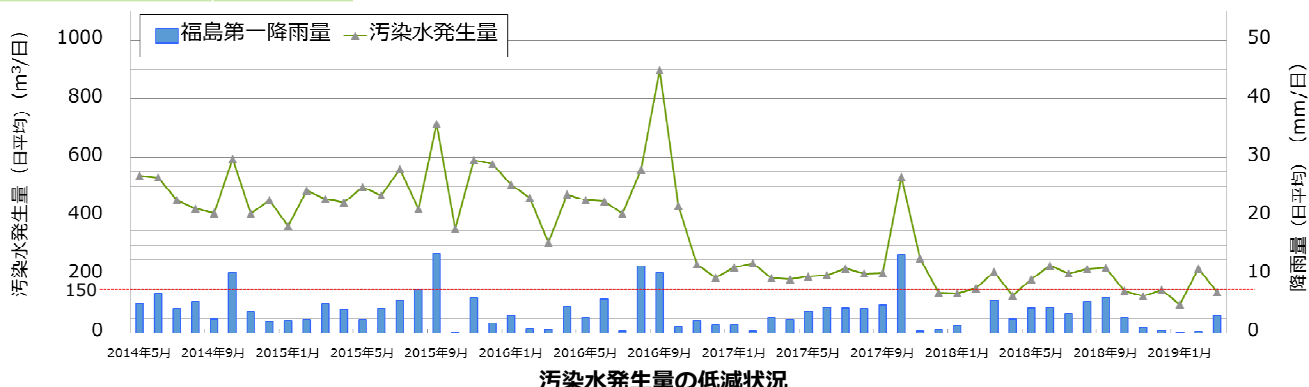
重回帰予測値と実績値



24

【参考】重層的な汚染水対策に伴う汚染水発生量の低減状況

汚染水発生量（雨水や地下水に起因する汚染水発生量にその他移送量※2を加えたもの）は、降雨期を含めた至近1年（2018年4月～2019年3月）の平均で約170m³/日となっている。



25